

**平成30年度
第2回藤島地域振興懇談会
会議録(概要)**

期 日：平成30年8月22日(水)

場 所：鶴岡市藤島庁舎

202・203会議室

第2回藤島地域振興懇談会会議録（概要）

- 日 時 平成30年8月22日(水) 午前10時～12時10分
- 会 場 鶴岡市藤島庁舎2階202・203号会議室
- 出席委員（五十音順） 9名
石川均、石塚健、井上佳奈子、上野隆一、菅原きよ、田中壽一、
富樫達喜、成澤正喜、半澤正昭、
- 欠席委員 6名 阿部啓郎、佐藤耕喜、佐藤二美、高山千代子、本間亮、前田恵
- オブザーバー 欠席 県立庄内農業高等学校校長 青柳晴雄
- 市側出席職員
〈藤島庁舎〉 支所長 武田壮一、総務企画課課長 菅原司、
市民福祉課課長 伊原千佳子、
産業建設課課長兼エコタウン室長 小林正雄、
農業委員会参事兼事務局長 三浦市樹
総務企画課課長補佐 叶野仁、総務企画課コミュニティ防災主査 齋藤隆、
総務課地域まちづくり企画調整主査 齋藤優、総務企画課コミュニティ防災専門
員 工藤仁、総務企画課専門員 叶野進、総務企画課主事 成澤勇太、市
民福祉課健康福祉主査 小林学、産業建設課課長補佐 成澤啓雄、産業建
設課エコタウン室主査 高橋智也、産業建設課農業振興専門員 鈴木理恵
〈本所〉 企画部地域振興課地域振興専門員 本間育子
- 傍聴者 加藤鉦一
- 次 第
 - 1 開 会
 - 2 あいさつ
 - 3 説明・報告
 - (1) 藤島地域振興施策の方向性について
 - (2) 市民からの意見聴取概要
 - (3) 農業専門委員会の協議内容について
 - (4) まちづくり塾の協議内容について
 - 4 協 議
 - (1) 藤島地域振興計画及びまちづくり未来事業（案）について
 - (2) その他
 - 5 閉 会

【会議概要】

1 開 会

2 あいさつ

3 説明・報告

- (1) 藤島地域振興施策の方向性について
- (2) 市民からの意見聴取概要
- (3) 農業専門委員会の協議内容について
- (4) まちづくり塾の協議内容について

4 協 議

- (1) 藤島地域振興計画及びまちづくり未来事業（案）について
- (2) その他

5 閉 会

2. 上野隆一 会長挨拶

皆さん、おはようございます。今年度5月31日に第1回目の懇談会を開催し、今日は、2回目となり、それから9月に3回目を行って、来年の2月くらいに4回目を行い、今年度は4回懇談会が行われるということでした。今回、市長が変わって地域の未来づくりをするための事業を行っていかうということで、各旧町村が取り組む事業に対して市が助成を行うということです。1回目の時には、とにかく藤島は農業の町ですから農業に特化した事業を行いましょうということでこの会を進行いたしました。それからこの間に農業の専門委員会が開かれ様々な意見が出されたようです。私もざっと今までの経過の報告を拝見させていただきました。それはそれとしまして、先月の始め、鶴岡のサイエンスパークにヤマガタデザインという会社がスイデン テラスというホテルとソライという幼稚園を今、作っております。幼稚園はまだですが、スイデン テラスというホテルは、8月からオープンしているはずですが、ホテルにせよ幼稚園にせよ、この地域ではもう飽和状態になっている施設と、実は思っておりました。人口が減少する中で集客というか誘客人口をみんなで増やそうとしてはおりますが、それにしてもホテルは結構建っております。全部のホテルが満室だというのはよほどのことが無い限り発生しません。そういう状況の中でさらにホテルを作るというのはいかがなものか。それからもう一つは幼稚園、少子化の中で幼稚園を作るというのもこれも過当競争になるのではないかとこのように考えておりました懸念をしておったところでした。しかし、見せてもらいまして「こういう考え方もあるのか」と思ったのは、やはり自分たちが泊まれるホテルが欲しいのだと。つまりはホテルの差別化です。また、自分たちがここで子どもを産んで子育てを行う中でこれもやはり自分たちが考える幼稚園が欲しい、という話でした。そういう意味では要するに個性化というか差別化を行うためにあえてこういうことをやっているのだなと思いました。もちろん山中社長をはじめとして今後の運営につい

ては、ホテルにせよ幼稚園にせよ、懸念という心配している部分はあったようですが、自分達でやっていくという、そういうアグレッシブな考え方でヤマガタデザインはあのサイエンスパークを作っているわけです。要は、こういうアグレッシブな考え方、我々も地域の活性化とか言いますが、他を押しつけてもやっていくような、あるいはそういう強さを押し出したような企画というのは、実はなかなかありませんで、何とか継承を図りましょうとか安全にいきましょうとかいうような考え方が多いのかなと思っています。ただ、これだけでは地域の未来というのは幸せには運営できないのではないかと考えております。今後の3回目に向けて具体的な構想というか計画が出来ていかないといけない時期にさしかかっていると思いますので、今日の討議はそのための土台作りになると思います。限られた時間ではありますが皆様の討論をお願いしたいと思います。

3. 説 明・報 告

(1) 藤島地域振興施策の方向性について

－ 資料1により説明 － 総務企画課 地域まちづくり企画調整主査

(2) 市民からの意見聴取概要、(4) まちづくり塾の協議内容について

－ 資料2、資料4により説明 － 総務企画課 課長補佐

(3) 農業専門委員会の協議内容について

－ 資料3により説明 － 産業建設課 農業振興専門員

4. 協 議

(1) 藤島地域振興計画及びまちづくり未来事業(案)について

－ 資料5により説明 － 総務企画課 地域まちづくり企画調整主査

○上野隆一 会長 以上で事務局側からの説明は終わりで、これに対して皆様から質問及び意見をいただきます。全般のいろんなところ、観点から提案をもらって、今の説明に対して質問事項はありますか。特になければ私の方で質問させていただきます。非常に多岐に渡った説明でしたが、全体的に今の説明における印象としては、課題が多くて対策が具体化できていない。課題は「ああいう課題があります。こういう課題があります。」というのがあるけれども、それに対する何をどうするかというところが考え方を示すに終わっている。つまり考え方を示すだけでは事業に結びつかないのではないかなという懸念があります。特にこの農業の町という中での問題点というのは資料1の一番上の緑の所、基幹産業の農業の停滞。ここに非常に大きな集約がなされていると思いますが、あまりにも大きすぎて、要は全体の説明を聞いていても思うのですが、全部を網羅して改善しようという気持ちが見えすぎて、本当のこの未来をつくるための「これを目玉にするんだ」というところが薄かった気がします。そういうところは何か考えておられるものでしょうか。藤島地

域の目玉はこれをやるのですというのが、バーンと聞いたせいかよくわかりにくかったのですが。

○武田支所長 農業部門について少し補足させていただきます。今、市では分野ごとに総合計画の策定作業を進めております。農業分野についても全般的にはその総合計画の策定の中でカバーしていくわけですが、その中で特に藤島としてはこれに特化して取り組むというところを今回計画として載せたのご理解いただければと思います。特に強調したかったのが、農業部門については、まず所得をある程度向上しない限りは後継者の確保が困難だということがはっきりしており目標も一千万以上の販売高の経営体の割合を20%までもっていく。販売高が一千万では、まだまだインパクトとしては弱いのですが、その割合はきっちり高めていきたい。そうすることで後継者の確保にも寄与するのではないか、そういう考え方です。

そのために藤島の特徴を踏まえて一番効果的なものは水稲単作経営から脱却して園芸振興を図るということで、今回園芸作物の拡大ともう一方ではしっかりとしたコメの振興も必要だということでこの1番目、2番目を特に強調した内容になっております。特に2番目の園芸振興については、これまで水稲単作経営の歴史で来ているものですからそれぞれの経営体において複合経営をする形態になっていないことからそれを地域全体でカバーできるような共同選果、共同体制の取り組みを伸ばすといったところを、農業分野については特に強調した計画となっております。もう一つ、コメの方で補足させていただきます。①作る人食べる人双方で支える地域農業、表現としてちょっと抽象的でわかりにくい内容かもしれませんが、藤島地域ではこれまで15年ほどエコタウンプロジェクト、環境保全型農業を推進してまいりましたが、まだまだ藤島地域でも浸透していないのかなと思いますし、市内の他の地域にもなかなか発信できていないという状況です。そんな中で藤島地域が保有するノウハウとして有機農産物の認証機関であること、また特別栽培農産物でも独自基準を持っているという特徴がありますので、そうしたものを地域内の農業者以外の方々に消費していただき、その購入の一部は交流の費用に活用する、また若手農業者の研修にも活用するということで、食べることが農業者の支援につながる。作る人と食べる人、双方で支えるというそういう仕組みを作り上げようと、簡単に言うとそういう形なのですが、そうした藤島発のコメプロジェクトに取り組みたいという特徴も持っています。農業分野についてはこの2つを特に進めていきたいと思っています。

○上野隆一 会長 私がもうちょっと聞いたかったのは、たしかに所得向上を図るというのはわかりやすい説明だと思いますが、では具体的にその所得向上をどういうふうにするのかという説明がまだ不十分だと私は思っているのです。園芸作物をやると言っただけで今までやらなかったのは何でやらなかったのか。今までやってこなかった実態があるからこそ課題があるわけです。その部分をやはり分析をし、その弱点の部分のここを強化すればこの地域で園芸作物が育つはずだという検証ができていないのかどうか。その辺までいかな

いとやっぱり具体的な方策というのは実際作れないと思うのです。そのあたりがちょっと欠けているのではないかなと。深みというか物を特定して突っ込んでいく、そこがどうも。あれもやりたい、これもやりたいとあるけれども。

それからもう一つは、捨てることも考えなければならないと思います。人口が、増加時代と今の減少時代とでは世の中反対になっているわけです。もっと言えば国がもう変わってしまったんだと私は感じているわけです。明治、大正、昭和にかけての日本という国と平成からこの後にかけての時代というのは国が変わったくらいの変化だと思います。そうするとやっぱり捨てるべきものは捨てていかなければならないのではないかな。みんな捨てるということはあまり得意ではないわけです、私も含めて。何かを少なくすることは嫌がって増やすことばかり今でも考えている。それはもう無理なのではないかなと今思っています。その辺がとりあえず私からの意見です。

○武田支所長 園芸分野で特に枝豆に注目したその理由なのですが、藤島地域では大豆の生産、作付面積が鶴岡市でも特に大きい。大豆のノウハウが非常に高い地域であります。一方で大豆と枝豆はその栽培においてはかなり類似していますので枝豆の作付に向かう可能性もあるのですが、ただちや豆とこちらの茶豆との価格差があるということではなかなかその伸びがないのが実態です。ただよくよく調べてみますとただちや豆のキロ単価が安く800円。概ねは1000円弱くらいなのに対して、こちらの枝豆は700円から750円ということで、通常の白毛の枝豆がキロ単価で300円から400円ですからそれに比べると非常に高めの価格になっております。これをしっかり生産、農業経営できるレベルまで持っていけばかなり安定した、補助金をあてにしなくても安定した経営になるのではないかなという読みで着目したところでした。私たちはやっぱり事務方ですのでその辺の技術的に可能なのかどうかといった検証も必要ですので、この取り組みの検討と並行してJA庄内たがわさんなども何度か会議、検討を重ねて、その中でもこれは有望な品目であるというような合意というか話し合いはなされています。

○OA 委員 質問ですが、先程支所長さんの方から農産物の販売高一千万の割合を20%にするという目標を掲げているという説明でしたが、現状はどのくらいですか。

○武田支所長 現状、藤島地域は9.3%です。それに対して鶴岡地域が14.8%ということで、複合経営が進んでいる地域がやっぱり圧倒的に高いことを示しています。

○OA 委員 それとの関連なのですが、枝豆についてこのプロジェクトでもいろんな意見が出ていますが、皆さんが頑張れば頑張るだけ、豊作になればなるだけ単価が安くなるというジレンマが農産物にはあるわけです。だから単純に作れば高く売れるというものでもないし。その辺の需給バランスをどう見据えていくのかということと、枝豆の消費時期というのは決まっているわけですから、生に特化するというのはなかなか難しい。やはり通年

食してもらうための加工という方向性も、意見としてはいろいろ出ているようですが、やはり合わせて売るといふことが必要。あと、こちらが売りたいものが必ずしも市場で売れるわけではないので、その辺の市場の調査とか方向性も考えていく必要があるのかなと思います。

○武田支所長 庁舎で作付面積目標 50ha、現状 24ha に対して、25、6ha を増やしていきたいという計画、目標を立てましたが、鶴岡市全体では枝豆がおそらく 770 から 800ha くらいあるかと思います。かつて鶴岡市農協はただちや豆 1000ha 構想というのを策定しましたが、なかなかそこまで到達せずに横ばいで推移しています。それが大体それなりの価格で販売する 1 つのラインと読んでいます。そのラインを引き上げるということで市の方でも関西方面へのトップセールスを強めており、まだまだ枠はあるのかなと思いますし、農協さんとの話の中でも藤島が二十数ヘクタール増やしても販売関係についてはいけるだろうというお話はいただいております。また、庄内たがわ農協では園芸販売高 40 億必達構想という目標を掲げていて、現状 17、8 億くらいしかありませんので、そこは力を入れていきたいという話もありましたので。この計画で 50ha レベルであれば何とかいけるのではないかなと思っています。ただ、加工も入れてしかもいろんな品種を取り入れて収穫期間を長くしてということとは必要だと思います。

○A 委員 今、関西方面を販路として考えているようですが、個人的に友人や親せきに送ってみると中京圏というか名古屋、岐阜あたりは関東、関西の両方の物が入ってくるからそこは枝豆の独特の味や香りなどは受け入れられるのですが、関西に行くとやっぱり違います。ちょっと匂いとか味に抵抗感があるようです。慣れてくれば美味しいと言うけれども、関西趣向というか、コメもそうなのですが、関西に行ってもブレンドされてしまっているとか。そういったことでその地域の味や好み、趣向、そういったものを踏まえていかないと、単に持っていけば売れるんじゃないかとかいう話ではちょっと難しいのかなと思います。

○B 委員 全体的に。今 4 項目について説明がありました。その中でいろいろな立場で意見を聴取してまちづくりに反映していくという庁舎の姿勢に敬意を感じているところです。藤島地域の振興策として 3 つの大きな柱を掲げておりますし、今も第一番に農業関連の施策が掲げられております。その中で藤島のブランド化、そして販売面の強化ということが意見として出されております。これまでもつや姫会としても販売面まで取り組んでいこうかということで検討してきた経過があるわけですが、たがわ農協は広域農協でもありますし販売の面においても農協以外に個々に販売している方が多くいるという状況の中でなかなか進まないという経過がありました。今回新たに環境にやさしいまち、そしてコメ作りの町ということで庁舎が音頭を取り、そういう販売面の音頭を取りながら進め、そして生産者個々やグループがチームを作って運営、運用していくシステムを作っていけば可能で

はないかなと思っております。また、園芸振興についても藤島の特徴としては大豆振興ということで機械化もされていますが、それをある程度活かしたところで、それも庁舎が先頭に立って機械の助成やモデル地区を設けながら推進していけば可能ではないかと思っております。また、ふじの里づくりの推進では、歴史公園と一体となったふれあいと観光の推進や暮らしやすい生活基盤では高齢化に伴う公共交通、それから子育て支援。そして新たに定住や産業基盤の整備としての開発がうたわれております。かつては笹花、藤の花が開発公社で行われてきたと思います。現在はどうなっているのかお伺いできればと思います。また、この未来事業は市全体で50億円規模の事業であります。藤島に例えれば大体10億円くらいの規模であろうと思われま。そんなことで核となっていくシステムとして未来事業推進課や推進本部やまた販売を伴うのであれば推進公社というようなものを立ち上げて暮らしやすさや交流、開発、販売といった、丸ごと藤島を作っていく体制が必要ではないのかなと感じております。今も各課で担当されて計画づくりがなされておりますし、総務の齋藤さんが担当されておりますがもっと強力な体制を作り、各課一体となって推進してはどうかと思っております。町内会長連絡協議会としては10月10日に市長と語る会が開催される予定であります。その中でこの未来事業についての基本的な財源や通常の予算とのかかわりや地域の裁量等、藤公園の活性化、それからランドセルや敬老会の持ち方、公共交通等をテーマにしながら話し合いを進めるということで、未来事業の浸透と理解を深めていきたいと思っております。

○上野隆一 会長 今、Bさんからかなり広範囲な意見なり質問がありましたが、特に私が聞いていて思ったのが、地域未来づくりの担当のセクションをもっとしっかり作ってそれに特化した活動をやったらどうかという話、これはなかなか面白いと思えます。これについてはどう考えられますか。

○武田支所長 今、分野ごとにプロジェクトチームを作って向かっているというのが藤島庁舎の実態です。その藤島地域の計画が定まった段階で特化するということも今後ありうるのかなという思いはあります。

○OB 委員 今もいろいろ出ているが核となるところが、例えば支所長を中心とした、昔ながら開発公社とかあったと思います、開発してきた経過があるかと思えますので。そういうようなことで未来事業推進課とか公社とかそういうものを立ち上げてやった方がもっと強力なのではないかと思うのです。どうやって実行するかがなかなか容易でないと感じます。そしてやっぱりそれだけのお金を有効活用しなければならぬということですので。

○武田支所長 現実的にその未来事業のみを担当するセクションを新たに設けるというのはちょっと困難な状況かなと思えます。現体制でやれる一番良いやり方として、通常業務はやりながらもプロジェクトチームを進めるというのが今の実態です。

OC 委員 ちょっと農業の方に戻らせていただきます。この基本方針の中で先程から販売高一千万、2割以上とあります。やっぱり少子高齢化でこの地域に住みたくなるような施策をしなければ当然藤島地域は残っていかない、藤島地域は農業の町だとうたっている。ただ、この一千万、いわゆるこの八ヶ谷農業は前々から言われてきたことだと思っていますし、今の現状を見れば農業就業人口が 1,000 人を割るというのは目に見えてわかっている。3,000 町歩を 1,000 人で割ればという話になってきて、農家を継ぐ担い手がなくなっているということなので、今、平均4町歩くらいになっている、これが自然と7haくらいになってくれば当然コメだけで八ヶ谷農業がクリアできるということだろうと思います。ですからこれをいかに達成するか、大規模で法人でも良いわけですが、個々のそういった販売高を一千万ということでもなく、一般企業並みの生活ができるような経営所得を得るようなことをしていかなければなかなかこの地域には残ってくれないのかなと思っています。先ほど枝豆の関係も出ましたが、支所長も話にもありましたが、たがわ農協では園芸販売高 40 億円構想。現状はまだ 20 億いっていないということで、倍增論はなかなか厳しい状況だと思っています。その中でも1つの作物として枝豆がここに入っています。ただやはり現状を見てみますと、東北各県で枝豆プロジェクトということで県をあげて推進しているというのも実態としてあります。特に藤島地域の農家の方々からは枝豆を作ってもやっぱり鶴岡のだだちのブランドからは負ける。先ほど支所長の話にもあったように1,000円/キロ、それが藤島だと700円/キロということで、ここでかなり差をつけられていくということでもあります。また、他県においても秋田も日本一の枝豆作りということをやっていますし、先ほどAさんも言ったけれど、関西等への販路拡大をやってもなかなかという部分もあると思っています。ただ、その中で、枝豆の加工、これもたがわ農協で、羽黒農協食品でやっておりますが、いわゆるペーストにして販売しております。皆さんご存知のとおり枝豆はただ剥いても中に薄皮まであります。その薄皮も全部剥いてペーストにして出している、そういった自動皮むき機もあります。大本はずんだ餅で有名な仙台の菓匠さんが、たがわ農協の枝豆を主に使用しているということですが、最近他の県でもかなり枝豆に力を入れてきており、菓匠さんの方で食味機を使い食味の数値を科学的に出しているということで、たがわ農協が他から圧倒されてきているという実状もあります。やはりここは基本的な部分で、稲もそうですが、そういった基本技術を省略しなくてしっかりと守っていかないとブランドはできないのかなと思いました。農協としてはその辺も技術的に指導していきたいと思っていますが、個人で販売しているの方々についても藤島地域としてそうしたことをきちんとして励行しながらブランド化をすすめていただければと思います。農協としても平成32年度にバイパス沿いの選果場を集出荷施設として大規模に改造改築します。ぜひとも米プラス園特という部門で何とかそこを拠点として農家の販売に役立てていければと考えておりますので、皆さんからもご協力をお願いできればと思います。よろしく申し上げます。

OA 委員 先ほどから一千万という言葉が出ていますが、一千万というのは売上なのか、所得なのか。

○武田支所長 販売高です。本来は、所得が一千万であるべきなのですが、まだまだ実は農業の分野では、販売高一千万をクリアしているのは少なく藤島地域では9.3%しかいないというのが実態なのです。ただ、一方では所得一千万、二千万という方はいらっしゃいます。それはこういった形態の農家の実現しているかというところと園芸農家が多いのです。特に西郷のメロン、ミニトマトなどです。

OA 委員 基本方針の方で新しく3番が出てきましたので民生委員として関わっている分野なのでちょっとこちらの方で何か質問させていただきます。まず、具体的な展開方策の中に長沼・八栄島地区の地域公共交通導入事業がございます。調査委託や視察といったことで当面調査の方に入るわけですが、デマンドタクシーは鶴岡駅や市役所や病院といった特定の場所で乗降できる仕組みとしてスタートしています。今回長沼・八栄島地区で出てきたのは、藤島駅という終点が特定されており、どうもデマンドタクシーなのか福祉有償タクシーなのかわからない。福祉有償タクシーというのは今もいろいろ動いているけれども、高齢者の通院とかのために、もしくは最寄りの公共機関がない所は公共機関、駅やバス停までの間の運行、そういった制約があったと思います。そうでなくてデマンドは通学・通勤でも使えます。ですからこの検討をするのも良いけれど、基本的にデマンドタクシーの方針なのか福祉有償で利用者が特定された高齢者だけなのか、あるいは高齢者であっても福祉サービスを受ける人だけが対象なのか、また、どこまで運行するのかということも踏まえて検討していかないとごちゃごちゃになってしまうし、地域が求めているのはどちらなのか、この前のアンケートだとアンケートを出す方もその辺を整理されていないままに出されているような気がしていた。そもそも藤島駅で終わりというのは、利用価値がないなという思いでそれを見ていたので、今回事業をやるのであればその辺の整理をしながら行っていただきたいと思います。

2点目が、具体的な展開方策の(2)で子育て世代特区という言葉を使っています。この特区というのがいわゆる国が認証・認定する特区なのか、単に特区という名称の自前の名前だけなのか、その辺整理していかないとちょっと誤解が生じてくるのかなと思います。

3点目ですが、地域防災拠点の整備について、これは前から言われていたのですが今回、豪雨の時に避難準備ということで、準備と実際の避難指示とは違うとは言うけれども川の西側の新町が川の東の藤島地域活動センターに避難ということで、これはちょっと現実離れしている指示ではないかと思います。むしろ前から言われていた駅前、新町を含めた西側に拠点施設の整備を図るべきではないかという感じを持ちました。もう一つ、大きい河川の中では、京田川がいつも同じ所で、発生するのでこれは県の方に従来から要望しているわけです。小さい問題ですが地域でできる、或いは藤島でも考えなければならないものが側溝の越水で住宅への床下浸水だとか、結局それは大きい事業ではないけれどもごく普

通のありうる話ではないのかと思います。側溝整備やかさ上げ、側溝の飲み込みを良くする、そういったものもこの地域防災拠点という大きな括りではないにしても地域住民から見れば大きな問題ではないのかと思うので、その辺も踏まえた計画づくり、要点整理が必要ではないかなとちょっと思いました。

OD 委員 健康でいきいきと暮らせるしくみづくりの中で「歩こう・貯めよう」ヘルスマイレージの導入で藤島歴史公園や地域内に遊歩道を作って歩くということでしたが、現在も消防署の前からグラウンドゴルフ場の東側を回って下町の方まで行く遊歩道があるのですが、私、グラウンドゴルフをやっていて見かけますが、あそこを朝、歩いている人は2人か3人なんですよ。今、歴史公園にその遊歩道を作ってもあそこまで行って歩くという人はそれこそ近くの人の2、3人くらいではないかなと思います。我々老人の健康ということでは本当にグラウンドゴルフの人口が非常に増えて、そのおかげで健康保険の支払いもずっと少なくなっていると思うのです。やはりそういうことで藤島のグラウンドゴルフ場は前はすごく他からも良いなということ言われてきたけれども、今はもう他の余目や羽黒とかの方がずっと整備が良くて向こうの方に行っている人が多くなってきている。やはり私たちはその中で遊歩道を作るのであればグラウンド場を整備して芝刈り機などを購入していただいて、そして我々も一緒になって整備していった方が老人の健康のためにはもっと有意義なのではないかなと考えるのです。

もう一点は百歳体操、今、イスの購入ということを言われましたがそのPRも、なかなか。百歳体操というのをやっているところが少ない。私も八色木の老人クラブでやっているのですが、やはり地域活動センターあたりと一体となって進めていかないと地域に広がらない。活動センターも自分たちで地域の人たちを集めて健康とかそういうものやろうという意識も薄いように感じる。やはり百歳体操ももっとPRをして各小さな公会堂でもやれるような、ビデオを各地域に提供するとか、そういうようなことで広げていかないとうまくいかないのではないかなと考えています。特にグラウンドゴルフ人口が非常に多くなって、そのために老人たちの健康づくりをしているということから、やはり整備、芝刈り機などの購入を考えていただければ大変ありがたいなと思っております。

○上野隆一 会長 私も今のDさんの話には大賛成でして、今現在やっているものをもっと拡充する、あまり今やっていない遊歩道なんてまさにそのとおりだと思うのですが、やっぱり役所の頭の中で考えるのではなくて実態からものを見て行ってそれを拡充していくというのがどうも不足しているように思える。これを見てもグラウンドゴルフのことはどこにも書いてない、この中に。グラウンドゴルフ場を整備しますとかあるいは新たに作りますとか、市民目線で見れば、そういうのは大切なのではないか。役所目線で見ればこれが大切だろうし。その違いがあります。

OE 委員 私からは農業問題について。今、私どもの土地改良区の仕事というのは、要は

生産基盤の整備と維持管理、これにつきます。今、皆さんのところの田んぼも30aに整備されてもう40数年になっています。よく見るとかなり老朽化が激しいです。それと先ほどから問題になっている就農人口の減少。これは現場を見ると本当にとてつもない状況になっています。32年では65歳以上が半分以上を占めている。その中でさらに50%くらいはもう70を過ぎている人だと思ってみています、資料を見ると。もう何年続くのだということなのです。今、各集落の担い手の皆さんからいろいろ意見を聞くと、周囲からあなた方にまかせるから頼むぞと言われても、とても今の状況ではこんなのは維持できないという返事が返ってきます。これは当然だと思って私もみています。大体自分の場合もあてはめて考えてみると、今、一人7町歩から10町歩というのは普通の経営体になっています。これを一人でやるというのはやっぱりかなり酷です。今の担い手の状況から見るとどうしても1経営体15町歩くらいまでもっていかないとこの地域が維持管理できないというのが現状なのです。ではこれを解決するにはどうするのだということになるとどうしてもやはり再整備を視野に入れていかないといけないだろうということで、本区でも5、6年前からこの地域の再整備はどうすれば良いのかということテーマにだいたい研究してきました。その再整備をやることによってまず農地が完全に将来的に維持できていくだろうということと、水田のフル活用というものはやっぱり将来的には視野に入れていかないといけないと思っています。それは田畑輪換ということになるわけです。それから、先ほどから問題になっている就農人口の不足、いわゆる必要になる労働力もある程度生みだしていけるだろうと。いろんなことを想定するとどうしてもやっぱり再整備をやりたいということで、山形県、国、いろいろ意見交換をしています。その中で今、私どもとしてどうしてもできないことが、この「営農構想」をきちっと立てて、いわゆる高収益作物を組み入れた絵を描いてきなさいという宿題を投げかけられます。これは土地改良区ではとても難しくてできないのです。いろんなところで勉強もしてみました。今年の2月には秋田県でこういう高収益作物を組み入れた事例発表を見てきましたが、ではここの地域に持ってきて、あるいはそのまま真似できるかということなかなかそうもいかない。いろんな問題があって、今、暗礁に乗り上げているのです。したがってこの地域の中でこの地域にはどういう作物があるのか、どういう高収益作物があるのかということ地域全体で絵にしてもらわないと、この再整備構想も全く進まないという状況にきています。8月の初めにも鶴岡市の部長さんからの声かけで因幡の再整備構想をもうちょっときっちり進めてみようということで県からも課長さんが来て意見交換をしながら、まずこれから将来考えていこうということでまずは終わったのですが。この地域としてどうするんだという、まさに今日出されている資料、これは非常に良くできた資料だとは思っています。ではこれを具体的にこの地域の中に具体的な事業をどうあてはめていくかということをしつかりと議論してもらって私どももそれに対応していきたいと思っていますのでどうぞよろしくお願いしたいです。

OF 委員 ただ今話を聞いていてこの懇談会でやはり藤島地域は農業の町だから何とか

農業で元気をつけてという話がありましたし、それに基づいていろんな会議もなされてきたと思うのですが、「営農構想」それをやはり、きちっとすることによってもう少し見えてくるかなという気がしました。どこか1か所が元気になれば、昨日の甲子園ではありませんが、波及して元気になっていくということなので、そこをもうちょっとみんなで考えたいと思います。女性の立場からするとふじの花まつりというのはどちらかというと期間が限定されているのでインパクトが弱いのですが、でも長年、ふじの里だから藤の花にかけて日本一のふじの町ということでやってきたわけです。お土産がないということでは20年ほど前は女性団体、商工女性部、婦人会、藤の実会とかいろんな会の女性たちが頑張って考えて、砂糖漬けにした藤の花とか種を何とか利用できないかとかやってきました。ここで今、お土産に持ち帰る物がないということで。ぜひ今年度は藤の種を乾燥させておいて来年のふじの花まつりの時にそれを各自が何かに作りかえるというのはどうかなと思います。ネックレスとか、あれは目玉にも使えるし耳にも使えるし、いろいろ考えればあると思います。去年の秋まつりで段ボールを使った車、あれは子ども達に大変人気でした。ああいう形で何か、今年のうちから準備すればいいし、つるを使って何かというのも、秋まつりで使えるかもしれません。やはりその時期が来たからその時期で準備して何とかしようではなくて、今年から、準備をしておけばいいと思います。D先生は何かやりました？

OD 委員 つるでやったけれども。やはり、今のちょうど若い時期にとって乾燥させないとだめです。古くなってからだとポキポキと折れてしまう。

OF 委員 だから種は結構魅力だと思う。それから小学5年生で稲作を勉強するのですが、そうするとそれに対する資料がない。子ども達が個人的に、例えば夏休みを使って、うちもちょうど5年生なので、コメの写真がないかとかと言われて気づいたのですが、子ども達がせっかくこの稲作地帯にいても資料とするもの、勉強するものがないのです。確かに田植えにも行く、稲刈りにも行くのだけれども全体の稲の成長なりあるいは文化なりを学ぶための資料がない。だから記念館をその資料館にするのか、あるいはエコタウンセンターを資料センターにするのか、いろいろ考える方法はあると思うのですが、ぜひ子ども達をもっと広範囲で稲作について学べるものを考えてほしいなと思いました。

OD 委員 1つ聞きたいことがあるのですが。藤島の歴史公園の中に高い山がありますが、あれはどういうことで作ったのですか。平らにしておけばまだ良いのですが。ちょうど小高い山を作っているのですが、私がいつもあそこを通って考えるのは、よく学校なんかにもああいう山はあるわけで、子ども達がいつでもここに入って遊べるようにああいうのを作ったのではないかなと思うのです。しかし、一切、子どもが入っていません。近くにブランコとかちょっとした遊具でもあれば親達が散歩にでも連れて行って遊ばせることができると思う。その辺りからも、ターゲットをどう捉えて、どういう意図があってあの山を作った公園にしたのかと聞きたい。やはり公園を利用させるにはどうするか考え、子ども

達を大いにあそこに入れて遊ばせてやるということがまず先決ではないかなと思います。

○上野隆一 会長 歴史公園の在り方についてはやはり再検討してもらいましょう。私もそう思います。あそこは歴史公園だということであまり変な事は言えないというような話があるようですが、やっぱり市民が活用できる場所にしたかったですね。ただ歴史公園なんて意味がない。

○武田支所長 9月1日、29日に歴史公園活用のワークショップもこれから行いますので、今の件も踏まえて検討したいと思います。

○E 委員 たしかあの時はそれなりの立派な理由があったのだけど。立派過ぎて。

○H 委員 子育て世代特区という言葉に魅力的だなと思いました。もう少しこのところで何か意見を出せることがあったら後々出していきたいなと思いました。やはり小学校とかでも子どもが少なくなっているのがわかりますし、危機感があります。三川橋の手前にも住宅地が出来ていますが、朝暘五小なのかなということもありますし、やはりああいう所にぽっと行く方が子育て世代は気楽なのかなというのは、何となく客観的に思います。ではどうやって藤島の地域に来てもらうかを考えると、その特色ある保育園とか小学校、中学校などは有効だと思うし、多分住めばずっといてくれると思うので住みたいと思うような環境を整えて欲しい。ちょっとなかなか難しいかもしれないのですが、なかなか思い描けないのですがそういうふうになったら良いなと思います。

○F 委員 私の知っている範囲でも立派な農業後継者なのに結婚していない人が数人いるのです。本当に立派な後継者なのだけど結婚していないから当然子どももいない。それで、農家に限らず結婚しない人が今すごく多いのです。何でだろうと思うのですが。そこは大きな課題だと思うのです。息子に聞いたら結婚しなくても生きていける、暮らしていけるからだって言うのです。自分一人で稼いで家にいて勤めに出て結婚しなくても暮らしていけるからだって。本当に、若い人が結婚しないのはなぜだろうと。ぜひ結婚して子どもを産んで欲しいのだけど。藤島で町をあげて結婚するとこういう良い事があって子どもを産んでぜひ藤島で育ててというのを考えられないかなと思いました。

○本間育子 地域振興課地域振興専門員 今のお話に直で答えられるものではないのですが。地域振興課から今日来ています。移住問題や婚活に関する取り組みもやっていますが、ここ数年そういった取り組みをやってきてやはり感じるのは、私たちがやっているその窓口の所というのはもう大人になって、できてから、の相談を受ける所であって、もっと根本に子どもの時代に、例えば家族の在り方であったりライフスタイルみたいなものであったり、地域の中で自分がどうやって大人になってここで暮らしていくんだということをも

っとどれだけイメージさせて地域の良さみたいなものをどれだけ植えつけるかというのが、その後の大人になってからの行動にすごく影響するものではないか。これは調査もあるみたいなのですが、今、確かな情報は持っていません。そうするとやはりこの藤島の中でどれだけ藤島ってこんな町だよ、藤島ってこうだから自分もそれを守っていく一員になるみたいなのって、やはり子どもの時代にどれだけそれをいろんな体験、いろんな大人によってだったり、それから普通に共同作業で女の子と話をする、作業をするのが当たり前だったりとか、そういった経験をどれだけ積んでくるかというのがすごく大きくて。それを藤島なら藤島、羽黒なら羽黒でその地域独特のものをどれだけ子ども達に伝えられるかがすごく大きいのではないかなと感じております。婚活そのものに関しては地域振興課でも、例えばイベントをしたいよとか、そういったことについては相談にのりますが、そういったことをすすめればすすめるほどもっと早い段階のものが本当に必要だなというのを日々感じております。

OH 委員 今、気づいたのですが、渡前小学校でも校長先生が一生懸命にそういうことを子どもたちに教えています。ここにいなさい、みたいな。いなさいというか将来も。仕事が無ければ自分で仕事を作りなさいみたいなことを言って。慶応の先端研からも講演にきてもらったりして教授が5、6年生に話をして、自分がどうやってきたとか新しいベンチャー企業のこととか教えてくれました。だから今の小学生でそうやって教えられた子はそういう気持ちで案外いるようです。私たちもあまり言われなかったと思うのですが、今の子ども達は渡前ではその地域の伝統とか獅子踊りとかも絡めながらすごく地域性を大切に教えているので何か感じとって成長してくれればと思います。でも、その前に小学校がなくなったら困ります、もう十何年かすると今の5、6年生はちゃんと大人になるのですが、そこまで持てばその子たちはここにいなさいという感じですか。事業をしている家の子もいるので。何か半分くらいはこのまま地元にならなさいという感じを受けました。

OB 委員 ここには載っていませんが、先般、雪若丸、はえぬきの看板設置ということで、今年度未来事業で100万円の予算がついたということで準備委員会があり、私も参加しました。その中で、新しい品種ごとに看板を設置するようになるのではないかと、やはり賛助金を集めて建てることは今の時代ではなかなか容易でないというようなこともありました。もっと藤島をイメージしたモニュメント的な建物をという意見も出されておりました。ぜひ藤島の町をイメージする、農業の町をイメージするようなモニュメント的な看板の設置を検討してもらいたいと思います。今年度に限らず来年度でも良いですから。第2回の準備委員会も検討されているか、お伺いしたいと思います。

○武田支所長 看板については今年度の予算化になっていますが、今回コメのプロジェクトも提案させていただきましたがコメで盛り上げる一環として看板、それからいろいろなプロジェクトがあっという間でやろうという思いであります。これからの持ち方なのですが、

看板設置の委員会をもう1回開くか、今は定まっていないのですが、それを除いたわけではなくて、今コメのプロジェクトをこれからまさにやろうとしていますのでその中に組み入れて一体的に盛り上げる。ただ単に物を作って建てて終わりではなくてそれにこういう取り組みが必要になってずっと継続していくという、そういう仕組みを作り上げたいと思っています。具体的な日がいつかとかはまだお話しできませんが方向性としてはそういうことです。

○上野隆一 会長 私から1つ。先ほどEさんから出たお話しの中で、今日は冒頭から農業をここは地域の大きな目玉にしていこうという話の中で、一千万というのは具体的で良いと思います。それで一千万をあげるためには、1つは茶豆を作るというのもあるけれども今のこの水田の稲作農業の生産性の合理化、労働生産性を上げるということが非常に大きな課題であり、大きな問題でもあると思っています。Eさんは言わなかったけれど労働生産性を上げるためには圃場整備が必要となる可能性も出てくるわけです。ところが圃場整備については、私も農地を持っていますが、多分皆さん、「総論は賛成です」、「各論は反対です」というスタンスが多いと私は思っているのです。やはり各論になった時に農業所得が入らないとかお金がかかるだとか、こういう部分についてどうにか手立てを打てる方法があるのであればみんなが賛成してもっと大きな圃場で生産性が高い農業ができるような、当然所得も増えていくので。これはすぐにはできないかもしれないけれども、やはりこの労働生産性を上げるためにどういうふうにしていくかというのも何か1つ、文言には盛り込まなくてもバックボーンとして盛り込んでいければ助かるのではないかなと思って聞いていました。

5. 閉 会（菅原総務企画課長）